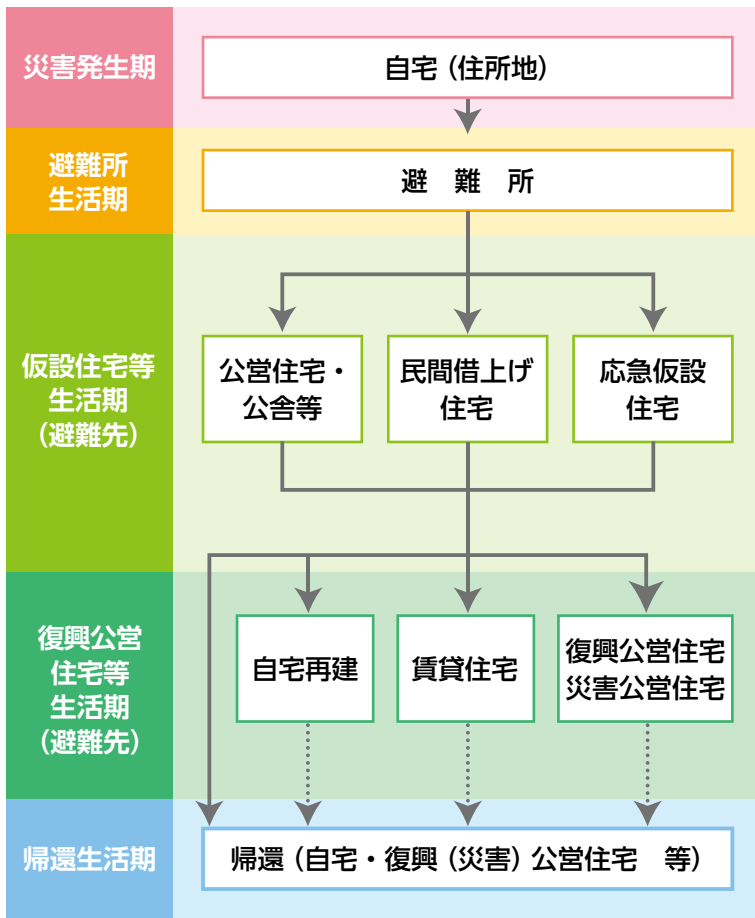




# これからの避難者支援 ～住環境の先にある生活再建の課題～

東日本大震災から7年の歳月が過ぎました。避難者の帰還や住宅再建は進んでいるものの、避難者一人ひとりの自立を見た場合、未だ多くの課題が残されています。今回は、これからの避難者支援のあり方について考えます。

図1 避難者の生活変化

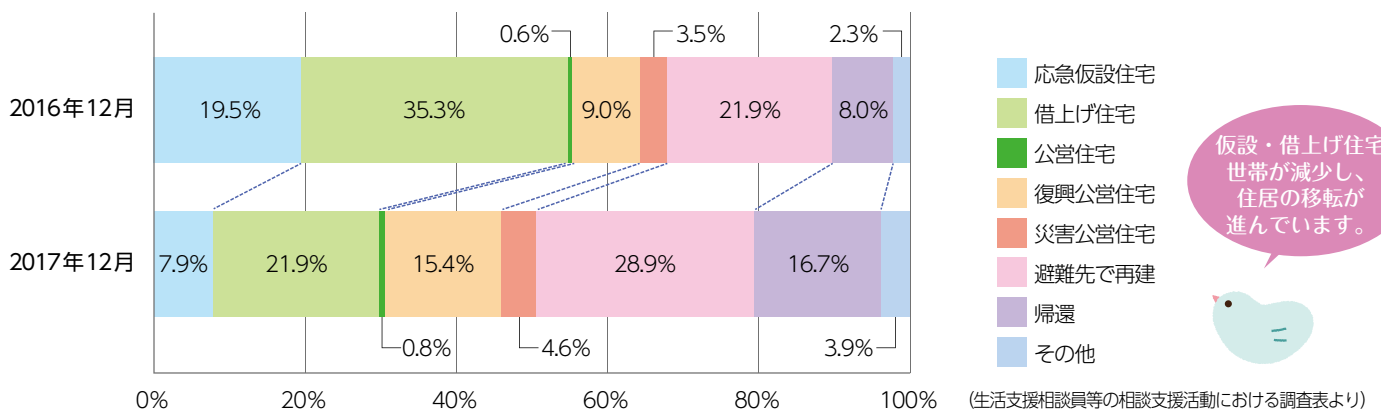


避難者の支援ニーズが  
年々変化しています

東日本大震災では、福島・宮城・岩手県内の社会福祉協議会(以下、社協)に「生活支援相談員」という名称で、仮設住宅等で暮らす被災者の支援を行う職員が配置されました。現在、福島県では23市町村社協で250名ほどの生活支援相談員が支援活動を行っています(平成30年2月時点)。

図1を見ると、住居の移転が進んでおり、見守り・相談支援対象世帯数の状況も近年大きく変化しています。これに伴って避難者の支援ニーズも変化しています。仮設住宅等生活期における「住環境の変化」「孤立感」といった不安に加えて、現在は「帰還の可否」「医療・健康」など新たな生活課題も出てきています。県社協では、避難者全員の自立に向けた支援を継続しています。

図2 見守り・相談支援対象世帯の推移(住居別)



仮設・借上げ住宅世帯が減少し、住居の移転が進んでいます。



(生活支援相談員等の相談支援活動における調査表より)

図3 避難者の生活期の変化に伴う支援のポイント

<p><b>生活面</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 安定的な日常生活が営まれているか</li> <li>● 生活困窮に陥っていないか等</li> </ul> <p>例 浪費、過剰な飲酒、ギャンブル</p>
<p><b>健康面</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 肉体的にも精神的にも健康を維持しているか</li> <li>● 要介護、要支援状態にないか等</li> </ul>
<p><b>社会性</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 就労しているか</li> <li>● 自治会行事やサロン活動に参加しているか</li> <li>● 引きこもり状態にないか等</li> </ul>
<p><b>本人の意思</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 避難者自身が今後とも支援を必要としているか等</li> </ul>

※その他、各市町村社協が把握する避難者の実情などを踏まえ、支援の必要性等を判断。

次の一歩を後押しするためにも  
避難者本人が本来もっている力に  
焦点を当てることが大事です。

福島県社会福祉協議会 避難者生活支援・相談センター

支援ニーズが細分化。  
福島県ならではの課題も

避難者生活支援・相談センター（以下、センター）では、応急仮設住宅や借上げ住宅、復興（災害）公営住宅、帰還された方を対象に、市町村・社協とともに支援を進めています。生活再建の課題には様々なものがありますが、福島県の場合、地震・津波による被害

に加えて、原発事故による問題もあるため、解決の糸口が見えにくくなっていくのが現状です。

仮設住宅等生活期では、安否確認や訪問活動などが中心でしたが、復興公営住宅等生活期、帰還生活期に入ると支援ニーズが細分化し、一人ひとりの困りごとに寄り添いながら支援を行う必要があります。センターでは、支

援のポイント **図3** を大きく4つに分けて支援の重点化を行い、避難者の生活再建を押し進めるといった方向性を市町村社協へ提示しました。

新しい「コミュニティ」  
踏み出す難しさ

私たち支援者の考える避難者の生活再建のイメージは「ぶつこの暮らし」です。たとえば、近所の方と挨拶を交わす、決められた曜日「ゴミ出しをする、子どもを学校に送り出すといった何気ない日常を送ることです。しかし、「ぶつこの暮らし」を取り戻すためには仮設住宅の「コミュニティ」を出て、また新しい土地で「コミュニティ」を組み立て直すという苦労をとまいません。これに家族や仕事の事情なども相まって、次の一歩をなかなか踏み出せない避難者もいるという実情があります。

新しい土地での「コミュニティ」づくりは避難者本人だけの問題ではありません。周囲の皆さんの理解や協力も必要となります。地域と個人の両面での支援が今後さらに求められていくと考えています。

その人がその人らしく  
生活できるように

センターでは、避難者一人ひとりの生活再建を後押しし、どこで生活再建されたとしても、その人がその人らしく安心して生活できるように支援を続けていきたいと考えています。そのためにも、本人が本来もっている力に焦点を当てて今後も支援に取り組んでいきたいと考えています。



# 富岡町の自立支援のいま

平成29年3月に一部地域を除き避難指示が解除され、1年を迎える富岡町。町に戻る人、町外での避難が続く人と町民の状況はさまざまです。現在町民が抱えている課題や問題についてどのような対策を行っているのかお聞きしました。

富岡町社会福祉協議会 事務局長 猪狩隆いかりたかし



富岡町社会福祉協議会では、帰町した町民がどこに住んでいるのか一目で分かる帰町者マップを作成し、効果的な訪問と情報提供に努めています。

## Q1 帰還から1年を迎えた現在の状況について教えてください。

富岡町の帰町者は429名で現在の人口の3・2%、高齢化率は40%を超えています。帰還が進まない背景には避難生活の長期化による町民の生活基盤の変化や放射線不安などがあげられます。町外に避難している富岡町民は住宅再建をされた方以外は、主に仮設住宅と復興(災害)公営住宅で生活されており、仮設住宅には約2300人、復興公営住宅には約1300人の方が入居している状況です(1月9日現在)。富岡町社協では支援の拠点を県内3ヶ所に設け、町内に5名、いわき市に15名、郡山市に13名の生活支援相談員を配置して支援活動を行っています。

## Q2 富岡町社協の支援方針と今の取り組みについて教えてください。

町外の避難者と帰町者では、住環境によって課題や対策も異なります。そこで現在は町民のニーズを探りながらそれぞれに応じた個別支援力を入れています。具体的にはこれまでの訪問記録や

現在の個々人の状況を整理して支援の見直しを行っています。支援を必要としている人が十分な支援を受けられ、自立を目指す人の意思を妨げない体制を取っています。また、帰町者の支援については、効率的な訪問を行うため、どこに誰が帰ってきたのか一目で分かるマップを作り訪問活動に活かしています。

さらには帰って来た人がどんな事をしたのか、どんな福祉サービスが必要としているのかニーズを把握しようとアンケートを実施しました。そこで分かってきたのは帰還して安心している反面、多くの人が孤独を抱えていること、畑仕事や近所づきあいなどができず目的のない日々を送っていることなど、今まで見えなかった部分が見えてきたことです。こうした状況は、町外避難者も同様で、社協が最も危惧している問題です。今後町民の意見を傾聴し、気づき、サポートするという原点に立ち返って、個々のニーズに添った支援を大事にしていきたいと思っています。





Q3

今後の支援活動や目標について  
ご意見をお聞かせください。

帰還がはじまったことで避難先での問題や課題だけでなく、富岡町内でもインフラの整備や医療・介護サービスなどが行き届かないといった新たな課題も表れました。また避難先

では、仮設住宅の退去者増加でコミュニティのつながりがなくなったことによる高齢者の孤立や、復興公営住宅入居者間のコミュニケーション不足による孤立が目立っています。そのため生活支援相談員による見守りの強化、自治会や関係機関等による見守り

帰町者の課題

「自宅における主な課題」

- 高齢者だけでの帰町不安(若い世代は帰町が進まないため)、帰町による孤立
- 病院や介護施設が少なく、十分な医療・介護サービスが受けられない
- インフラが整わない

「町内の災害公営住宅における主な課題」

- 入居者間のコミュニケーション不足、孤立化
- 集合住宅での生活に馴染めない

町外避難者の課題

「仮設住宅における主な課題」

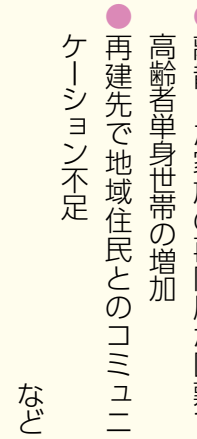
- 取り残され感、孤立感、孤独感を抱えている
- サロン、茶話会などの参加者が減少し、憩いの場の機能低下

「復興公営住宅における主な課題」

- 高齢者の引きこもりによる運動不足や孤立化
- 帰町するまでの居住場所とする人と一生の住処とする人の二極化

「避難先で住宅再建した  
場合の主な課題」

- 離散した家族の再同居が困難で高齢者単身世帯の増加
- 再建先で地域住民とのコミュニケーション不足



帰還された皆さんが安心して暮らせるお手伝いをしています。

富岡町社会福祉協議会  
統括生活支援相談員

猪狩早苗さん



故郷である富岡町の力になりたいという思いから、富岡町に帰還した方への支援を行っています。帰町者一人ひとりから話を聞くと同時に、健康状態や、ひとりで買い物をしたり公共機関を利用したりといった生活ができるかどうか、周囲の人と関わりを持っていくかということを確認しています。事務所に戻ると、その日にあったことを報告し、必要があれば、医療機関や町の住民課などの専門機関に相談することもあります。

ネットワークづくりなど官民一体となって協力しながら支援を行っていきたいと思っています。  
帰還者の支援はまだ始まったばかりですので先に帰還を開始した他の町村の後ろ姿を見ながら、富岡町独自の特色ある事業を展開していきたいと

思います。そして富岡町に帰ってきた人たちが「帰ってきてよかったと思える環境づくりをしていくことが、一人でも多くの帰還者を増やすことにつながるのではないかと考えています。

また、サロン「ゆうゆう倶楽部」を毎週開催し、お茶会や体操、クリエーション、調理教室などを行っています。毎回参加してくださる方も多く、住民の皆さんの居場所となっています。

訪問やサロン活動を通して住民の方々と話すうち、聞こえてきたのは「さびしい」という声です。復興とともに町の姿が変わり、周囲の帰還者も少ない状況で、孤立感を抱える方も多いのです。そんな思いをさせたくない、一人ひとりが孤立しない支援をしていきたい。そのためにも、住民の皆さんの声を聴きながらニーズに合った活動を行うとともに、現在も避難している方が安心して富岡町に戻って来られるよう、情報を発信していきます。